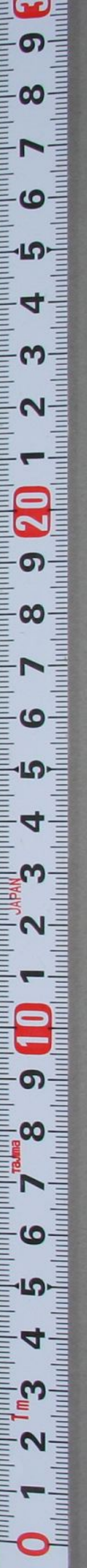


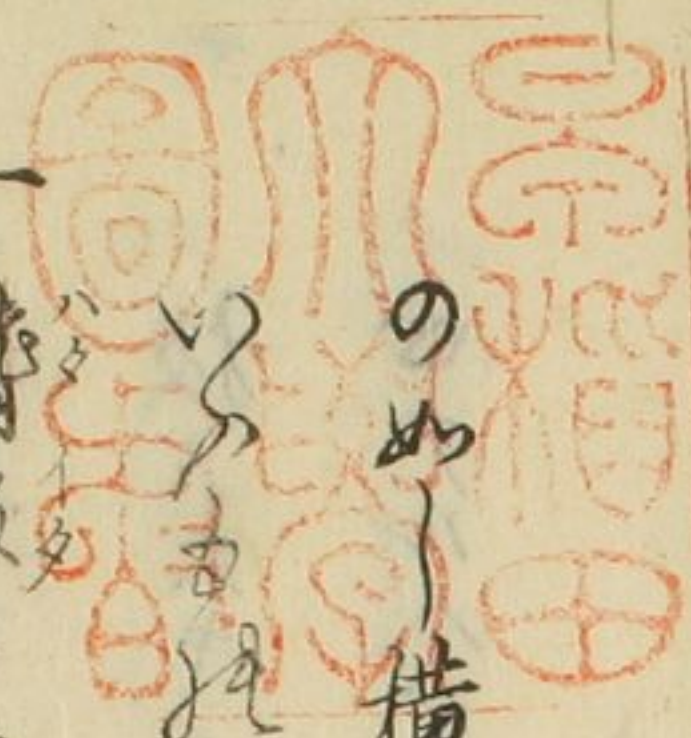
貞丈雜記

十四下

73
6592
28



門 73
號 6592
卷 28



の如く横金畫ハ母屋ヲ七堅の畫ハ放出ノ世傳ノ角屋と

一 鱈板ニ事東鑑脱漏ニ曰嘉禄元年五月三日癸亥二品

ノ御方鱈板中門兼織戸可被立云々汝石集卷ニ忠言

有感事^上或時ノ物語ニ涉所へ參シタレバ人家ノハ夕板ハ内

ノ見苦シキ事カクサンタナルニ泰時ガ家ノハ夕板ハ内マデ

見へトオレリトコソ仰有ツレド人々ノ中ニテ申サレケレバ次テ

ヲ以テ奉公セント思ヘル人々ノ涉所ノ仰ノ如ク誰モガココソ

存儀へ太方ハ涉用心ノ為ニモ築地ヲツカレホリホラレテ候

ハ目出儀ナシ各一本ヅツキ儀ハニ十日ニハスキ儀ハニ安

昭和九年四月五日
三上希正氏
贈

キ事ニ倣ヤガテ此次ニヒシクト涉沙汰倣ベシト口々ニ申
ケレバウチウナツキテ各ノ清志ノ色ハ返々有難ク覺倣
誠ニ清志アレバ清身ニヤスクコソ思ヒ給ヘ氏國ノヨリ人
丈夫共登リテツカン事バカリナキワヅラヒ大事ニテ倣ベシ用
心ノタメト仰倣ヘ氏泰時運ツキ倣ヒナバ鐵ノ山築地ヲ
ツキテ倣トモタスカリ倣ハジ運有テ召シ使ハルベクハカク
テ倣トモ何事カ倣ベキホリナンドホリテ倣ハバサバキノ時
人馬才チ入テ中々ハカリナキワヅラヒ出来ヌト覺倣ハタ
板ノスキナンドハカキモナラシ倣ナント申サレケレバ人ノ詞ナシ
心アル人ハ感涙ヲナガシケリ按ズルニ右ノ文ヲ見レバ鱸板ハ

今世ニ所謂板堀也鱸ノ字ハ借字ニテ實ハ端ナル
ベシ端ノ字ハタトヨム宅地ノ廻リノ端ニ板堀ヲスル故ニ
ハタ板ト云フナルベシ

一 狭板ハサミイタ之事東鑑ノ卷三十八寶治元年六月二日癸未近國
涉家人等自南從北馳参中畧五郎左衛門尉盛時者
聊遲系ノ間光盛等甚周章耐運カ云從雖被閉門戶
五郎左衛門尉冬入者不可滯ホ去ク詞不終懸ニ手
於狭板上者諸人屬目是盛時也云按ズルニ狭板ハ門ノ
両方ノ袖ヲ云ナルベシ左右ノ立柱ニ溝ヲ堀テ其溝ハ板ヲ
横タエテ狭ミ入ル也是ヲ狭板ト云

スノエ
一 簀子と云事古書は有り座敷の外は細き板を横に敷
うべておたる縁之板と板との百をきき有りて竹簀子を
あはせりめくあり

一 侍又ハ内侍とも云置敷一名簀敷の内敷は敷く外廻り
の廣くとき板敷をいふ之家臣の祇供して侍と云云
意之遠侍は對して内侍とも云之遠侍ハ置敷の外には
あれて座敷ある者之座敷重門の内より

ヒタキヤ
一 火焼屋と云ハ内裏にも東宮飛宮御宮院にもあり此所の
此座の明の爲に衛士と云フ官人ハ火を焼く小き座敷
夜もろうたく之座敷は床あけて地まで焼くは家次者等

或ハ火焼をラ
飯ヲ炊ク屋也
ト云ハ大ニ誤也

一元日宴會は爲^{ト云}撒去東西火炬屋^{ト云}東置日華門北掖
西置紫宸殿西掖主殿寮役之と云云云云紫宸殿は
所す人のひきき座敷と云と云云云云云云云云云云
まハあはせりて小き座敷をもち来りて坐す或ハ外へ出
坐爲之今世武家ハ假番所と云云云云云云云云云云
ひありききて坐敷あり

トコカザリ
一 床蓐は引敷蓐と云云の蓐蓐とハ床の内敷板は敷
白絹之練蓐を用也近代ハ白練蓐子紗蓐を用ふる
又又引の絹ハ床の左右の柱より降る絹之上を天の
罽と云蓐礼又ハ具是之忌の時を床蓐は用ふる
貞丈抄に
ける古儀

産鋪飾之部

一 ^{サシキカザリ} 生花飾はなざかりは其の飾として床に佛像の画をかけ、^{ケシヒミツ}香爐けしひみつの端
^{ニシク}香爐ニシク花籠はなかご ^{フシイタ}是を二具 ^{ホツス}あど紙卓ホツスはき ^{シユモク}並押板しよもくは硯いん之原
墨すみ等らを並上ならみは喚こゑ障まがをうすあの櫃こは拵ほつ子す撞ぶ木もを
かゝる子こ禪宗ぜんじゆの書院しよゐんの辨べんを学まなたる物もの之の名な氏し以もハ夢ゆめ又また定ぢやう園ゐん
作つくも作つくとして禪法ぜんぽうは海うみ依より終はひしよりして生なま花はな飾ざかりは禪
宗じゆをうすかれし之の東あづま都みやこ將軍しやうじん出い代だいは禪宗ぜんじゆ海うみ依よりよりして
右みぎの飾ざかりを用もちしれし之の主しゆはより寺てら方かたの作法さくしやくとも武ぶ家けの
飾ざかりよりもあり前まへも云いはく書院しよゐん之の園ゐんを云いはくしる

寺方より出るる也

但云園と云名東都將軍時代僧家
 といふあり書院といふ名ハあるし

食け物ぶつ


折せ食け籠かご物ものは精進しやうじん物ものを賞あづか覧らんと魚いさな物ものを次つぎとするるも
 佛ぶつ法ぽう信しん作たくして常じやうは精進しやうじんする人もありし之の人ひとの精しやうを
 もつりかたき也なり

一 東山とうざん殿てん佛ぶつ書しよありしと云物ものありてかゝる物ものは之の何なに也



ある物ものは禪ぜんありし也但たゞ何なに書しよは列りし
 燈とう籠かごと云物ものありし形かたちもはうりあり

に似る物ものは燈籠とうろう飾ざかりといふ櫃こはうけて並ならむ物ものは一いつ櫃こ飾ざかり
 もかりありし也葉は籠かごをいひ物ものは思おもはるる也葉は籠かごは
 かりありしと云物ものあり河か黎り勒りと書しよ之の一名いちめい新しん子しよと云物もの

の裏に手形六稜ありて  此は之右の飾物のかりろ

くもは茶種のかりろくは似る形おかりろくと名付る

おまゝへ又かりろく丸と茶葉のりハ飲食の類に記し

又柱かろうのかりろく和泉茶
よのせくる茶葉に記せし合へ

一 繪又ハ詩歌物語など書きて巻物を益あがまはしむり相ふ

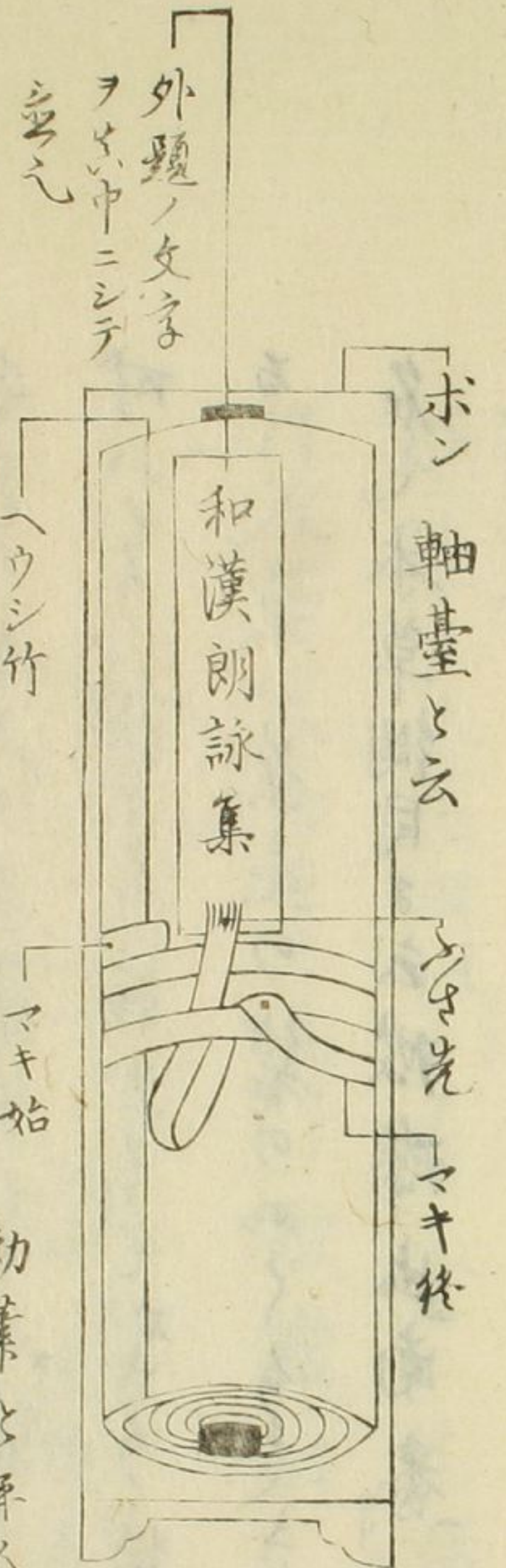
とに書まハ外題を平に上よむけて字段を先におよむ

折らぬへ一巻終ハトして巻くべきこ上して巻上れハ

外題の文字は懸るるも書きて懸き之徳の爲折らぬ終

て終の先をこすは折て口かのを終の巻めよ上り

下へおひきぬへ一巻先ハ上へある



外題ノ文字
ヲ中ニシテ
ニ書ス

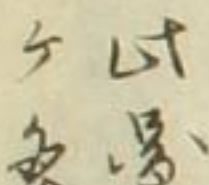
ボシ 軸臺と云

和漢朗詠集



ボシ 軸臺と云

是ハ茶湯方向明茶の風
尚世に以表紙并を其
中にして書くは此の
外題をば向て書き
又巻終をより上へ
書上はて巻上り終の

一 かりろくの書  此書はつと茶葉をえり茶の書の
ケ茶と引合せえらる

貞丈云口ニサス
セシノ頭也



和泉草は訶黎勒とあり訶黎勒と云ふ

和泉州は云大小ノ象牙ヲ以テ
鳥ノ卵ノ如クツクリタルモノナリ
柱錫ニ可然也胡銅鑰石ニモ
有ベシ云々

一 もりの袋君臺觀

太永年中真
相阿弥ノ作

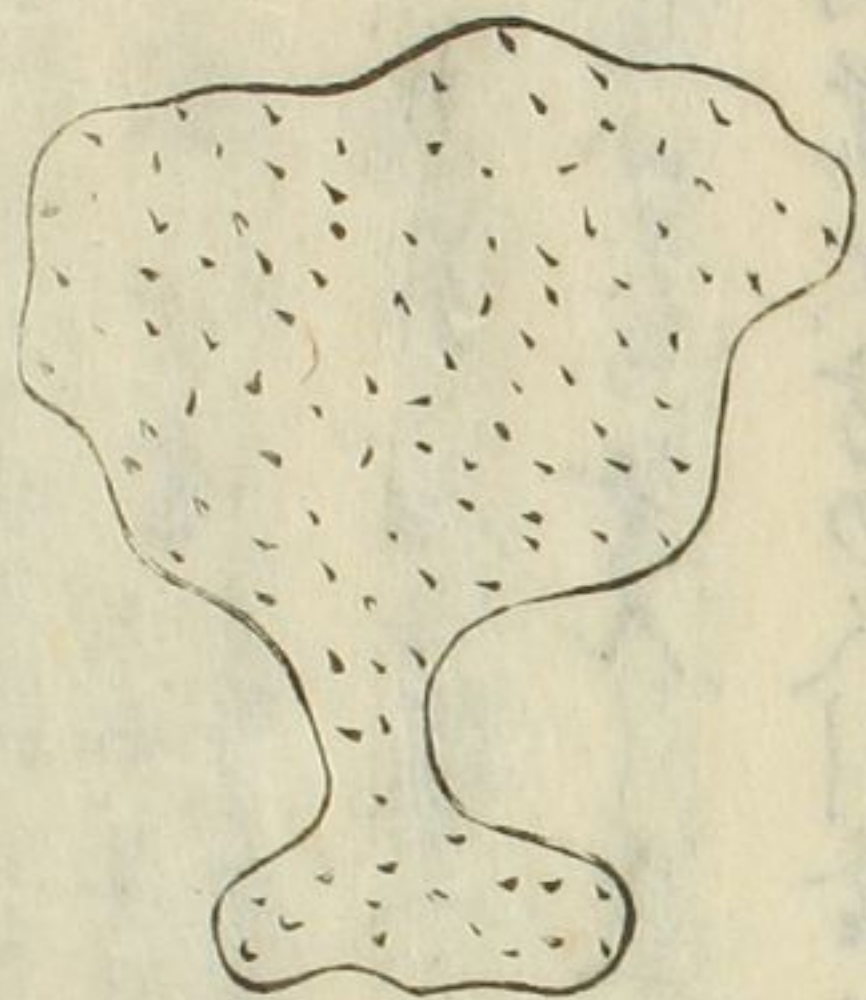
云西のまゝに漢書あり

つまるゝ巻物に飾付けその袋と名を玻璃と云物な
床飾は羽のりもりのハ盆は形。床飾はもりの
そもりのをへて並袋をもりの袋と云ある物に飾
附はもりのハ袋より取出してかざり袋ハ柄はうけら
るゝ之袋ハ茶壺の袋の如くもりのハ玻璃ハ圓ノ
名之本草綱目云玻璃出南番酒を紫色白色

スイトホラ

澄澈と水精相似トアリ今ハ古物ありはいと

すてこららゆるとあり 玻璃形



玻璃本草ニ見
如此ノ物ナリ

シブクツイ

一 四幅對君臺觀ニ云東山殿飾の中四幅一對の附ハ
三具足不之並いと名を四幅對も飾はあもりの之礼
系云文龜二年七月十二日涉冬内始法進相法飾
四幅居涉盆云々

紙類之部

一 檀紙ダンシと引合ヒキアハセとの別の紙は今の世の人をせんヒキアハセの一名を引合と云ふを得るにあらずり之旧記は太たうだんヒキアハセ小たうせんヒキアハセ大引合小引合又大引少引合と云ふこの名見たりヒキアハセ大永八年伊勢折紙調は括るる折紙のまの言きの狼藉は公方極ハ常より家門迄大名元ハ備中紙の小たうせんヒキアハセを一重より二重に折て用ひはれお伴元同前大方の人引合杉系ヒキアハセと云ふ用ひ又云せんヒキアハセ十帖引合杉系ヒキアハセも十帖と書へ武雜記は云引合

だんヒキアハセをハ紙ヒキアハセありては倍ヒキアハセ又ハ雲大式と云書ヒキアハセ井字ヒキアハセ檀紙定法堅一尺三寸横は尺九寸引合堅一尺式寸横一尺九寸六分とあり是亦せんヒキアハセと引合一物ありす別物ありは按へ

一 だんヒキアハセハ色白くあつて紙の面はちりせんヒキアハセのことと云ふ何れ紙あり太たう小たうと云はだんヒキアハセのたけの大小を云ふものと云はたけ也竹箒をたうむヒキアハセと云は同例と云ふけと云青通と云ふ

一 引合ヒキアハセと云紙ハ昔ハ白くて今ハ赤き紙ヒキアハセと云ふす黒き紙ヒキアハセありありす墨紙ヒキアハセも云又陸奥國より出たヒキアハセちのく

紙ともいひしと来りて書きたるは云原氏物語はみちのく紙の
 元ありぬあとも傳はさぬ討の引合の事といひりて云々
 のく紙はす思紙の子原氏物語次第磨の志の抄あとも
 元元たり又引合と云ふは事大式は引合紙は或は陸奥
 紙と紙と又唐墨紙といひしは往古他の女子を以て我
 う子の男子は引合せ夫婦の情を結ぶ時紙は固縁を
 書て女子の親を巻はせし女子の親我う梅はあは彼紙
 の裏は書報を成して約束を結ぶ又女子の親我う梅
 は合されは書書ありては事趣を以て夫婦を引合す日
 不之極は引合紙と云ふは後分りて云後何れも中興

雑記十四

廿六

紙のついで
 親長日記は文
 明四年五月廿九
 日元長令書序
 教書宿紙面時
 發得は間用白
 紙といひはより
 宿紙拵底と
 してを記す

祝儀は用之又云今は紙を祝言祝儀等も用之水
 黒紙あつた飾り又言括り時條を包む折形の時思
 して祝儀は紙を用多し云々
 今京都三ッ紙ノタケ太キクヨコ
 ニシホアリテ厚キヲダンシト云紙ノ
 タケダンシヨリハ小クウスクタテニ
 シホアルヲ引合ト云ナラハセリ
 うす墨紙と云ふは二ホあり引合と宿紙の二ツ也
 紙を川と云書 今ハ墨紙出まは
 宿紙と云ハ山城國神を川と云書き出すと云下一の紙
 カウヤカワ
 也神を紙と云色うす墨紙紙多りあうす墨紙も
 云今うすこの輪首と云ハ宿紙は輪首を書て下を
 いふ之上古ハ紙がうす墨紙禁中と云も書きしを引
 らせたりと云古例よりて今も宿紙は輪首を書る也

雑記十四

廿六

彦利往來より薄紙依井底用及古山とあるを名れの鎌倉
時代迄も紙少く用ひてされはききうへを多用されたる
宿紙と書くはききうへもききうへもききうへもききうへも
いふ今世の薄紙依井底用とすはききうへもききうへも
くはあき紙也

一 今世の鼻紙といふは古くあり古くありといひては引合紙
を一枚のすて打て用ひてお板の先横の二つは折を堅
よ二つは折又これを堅二つは折の上横の二つは折堅四つは折
とをいへりも紙の懐中より見ると鼻をよかき
外の用ひるもつひたると又紙がよきといふ時世の紙

杉木折りの
百色の四葉葉
三つ三つ合

書く紙を紙と云ふは紙といふは紙といふは紙といふは紙
葉といふは葉といふは葉といふは葉といふは葉といふは葉
たういふは紙といふは紙といふは紙といふは紙といふは紙
云ふは紙といふは紙といふは紙といふは紙といふは紙
射子の鼻紙といふは紙といふは紙といふは紙といふは紙
並に的といふは紙といふは紙といふは紙といふは紙といふは紙
武雜記射子のたう紙といふは紙といふは紙といふは紙といふは紙
たてき紙は四つは折又横板は下は折を四方は切れハ大
畧をききみ紙のす法はあり自然にききみはききみはききみ
ききみはききみはききみはききみはききみはききみはききみ

大平記卷六將
 軍自苑紫御上
 浴ノ糸ニ云杉原
 ヲ三帖短冊ノ廣
 廿二切ラセテ自ラ
 觀世音菩薩下
 書セ玉ヒテ舟ノ
 帆柱毎ニ推セラ

宣胤卿記ニ云
 永正十六年正月
 十七日自花恩
 院使樽一荷
 折ニ合以上大納言方
 奈良紙一束ハ

地より上へ〜のたけし守斗云々
もろもろの才法は後述の如く
 前板に守四方切て申は候と云
 一 今時女の髪巾かきもゆひなまゐにたけあつた紙あり
 古のあき紙といふはうもあつた合杉糸あきをたて
 て用ゐるは是を引さきあつたゆひと云々

杉糸スキハラの紙ハ今のまゝ入色と云紙のあきかぢへ色別徒
 糸は播磨杉糸とあり 播磨國よりすき出たつた也
 用集杉糸紙ハ播州杉糸材始テ出之云ふ糸九代記ハ
 云兼久元年杉糸紙始而流布云々
水ウシヨ
 奉書といふ紙ハ古のあきと名目とす書紙ハ杉糸を厚く
 すきこつた物也近世を書紙と云紙あるは奉書と云

一 奈良紙と云紙の名三好亭に清成記相阿弥は飾書
 等ももろろ大和國のあきより出る紙もろろ書具清成記
 にも古紙紙二十束奈良紙十束と有り職人を款合口申
 らる我身よりふ紙うろこのうすきちきりハむきはさる
 しをまゝとす古紙古紙紙も古紙あり
 一 旧記ハ大引少引とあるハ大引合小引合のり也
オホヒキコヒキ
 一 いまはうろろ紙と云紙ありは紙を白くすくして見
 れハ髭の如くもろろ紙也世ハ髭切と云
或書ハ
 一 糸の糸と云紙も古よりある紙ハ糸の子糸の紙と
 云糸の糸を畧して糸の糸と云糸の糸ハに糸を

大繪巻十五巻半切繪十一巻同年七月丁金繪
半切一巻云々

一 美濃紙日記 十三年十月六日 為は菓多いづもあつき兵衛
紙可有進上云々

一 薄白紙日記 十三年十二月十五日 薄白十帖花園に進云々
薄白未不詳

皮類三部

一 虎の皮ハ用ゆるは古 豹は皮ハ方極は用の多に
此百面ハ所用あり也と書札難クハ書ハ何れ
古ハ豹の皮ハ虎の皮よりも貴き物とあり
古ハ靴履ハ古ハ虎の皮ハ古ハ虎豹の皮は同
その方極古ハ及之職の元ありハ用あり云々
内も豹の皮ハ別してその方極所用あり云々

一 熊の皮も古ハ常の人の不用し 彈正の官判官 檢非違使尉の
此靴履行膝補皮の類也 熊の皮を用ふる法あり也



旧記に見えり

一 舊記は唐皮カラカハとあるハ皆虎の皮の事と建武二年記は唐皮尻鞘切符と何れも義教は元服記は切符唐皮と何れも又唐皮の禮と云ふ皆虎の皮の事と古書は唐皮とあるを今の世阿弥院より海老舎唐草の事とあるは

一 天平草と云ハ白草比々カラカサノヤウモヤウをかき色は地をくして白くもやうをゆる草と云ふもやう不動明王の像八幡の二字梵字天平十二年八月の七字を付くは甲冑の飾は用ひき為は作りたる草あるは冑のまひさし耳袖のわら

天平八十四代聖武天皇は代ノ年号ナリ
マビサシ弦ハシリ
其外ノ形ヲヒ
サシ其ツトマワ
リニ別ノ草ニテ

ヘリヲ角ルニ
モヒサクシタル
ヘリツ舟ハ相
志ノ大サニナル
ナリ

貞丈云正平以前義家頼朝義経ホノ古鎧ヲ見ルニ正平草ノ丈ニテ色金藍色ニ丈アリテ地白シ是古藍白地ト云ヒ也正平草モ其丈ヲ用テ板ヲ削タル也板ハ金板也云

の板あるを包むはつにうとて張書てその内はわらを
付くは草肥後國八代郡より出くは板あるはわら
をわらとて張るはわら
わらわらの平白く牡丹唐草は獅子は
丸の内は梵字あり又不動明王の像あり
一 正平草も白草は地をうき色は白く紋を出き板木を
以てわらを付くはわらハ唐草獅子あるを付正平六年
六月一日の八字もわらの内はわらあり天平草はゆる草
也是も肥後國八代郡より出くは古より八代郡は天平草
の板作りて草もわら張りて出くはわら不動明王の
像八幡の二字梵字等を付く板をわらとて作りて中はわら
高買をとりてわらを西將軍懐良親王八代郡宮田に

天文十一年日記
云十月八日牧雲
軒赤面草一枚
給云々

比叟何りし時南朝のはつ天子西人きて南朝北朝と分れて合戦あり太平記に云 正平年中不

正平の南朝後 別の板をきぎぎせりて南朝買はるるをハ比

免ありしと云ふなり正平比免草と名付たりと云たは比

草と云何り正平比免草とハ別也

一 比き草といふ地をむくまきと比てを白く出

しるをさくは益懸矣沙汰日記付録の記に何り正平草を

いしき草と免する人ありあやまりし

一 おのて草と云ハしき草のりし高忠の草と云ふなり


一 ひきり草といふか馬ぬりの草は赤うなりと云ハるび

ての折るの牧を書する草之真衡説也 引目草のト
結のり或説記

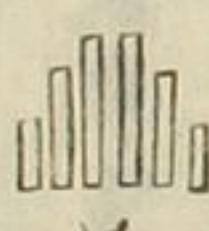
形毎記ホ
はるる

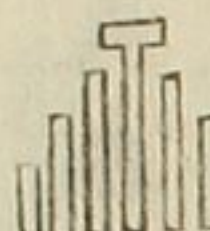
一 菅蒲草ハ地をまき又ハ丸元き地すてあやめの花葉を

いけいしるも並て深く白くも草を歩はし又花

もさしもさ  比又弱形と云も馬の形を小く深

くも又丸形と云もあり  比形を深くハ丸の形

似るも又折まると云もあり  比の形  比あり

何り  比ありあり又小根草品草あり志や

うぶ草の形 小根草品草ホの
ありありあり

一 だて志やが横志やがと云る菅蒲草のものを

だてよあふして深くハ比志やがと云横はあふし

漆シのハ横志やう之皮の塗りあるハ 豎横のつゝハ

やうカ、漆皮のり大迫也 又一説ハ軍陣圖書云永正年

若按守 忠勝記 よこ 葛蒲と云ハ駒の紋永正年を云小八木

中 大て葛蒲と云ハ志やうハ斗あるを云 貞丈云此説を

貞丈云駒の形あるを弱形葛蒲と云カキウ

一 カモシカ あくの皮と云ハ 羚羊レイヤウの皮のりカモシカ

一 レイヤウ 羚羊の皮ハかやうの皮カモシカ あくの皮のりレイヤウ

一 カモシカ 羚羊を鞆カモシカと書くる本あり引巻のり大迫也

一 カモシカ あくの丸の韋をハカケカモシカけカモシカはすカモシカきカモシカ申カモシカ村カモシカハ具足カモシカ秘傳カモシカハ

むちのつゝカモシカハもカモシカもカモシカすカモシカきカモシカ申カモシカ村カモシカハ具足カモシカ秘傳カモシカハ

村ハ具足秘傳シカハ麻シカの丸の韋シカとありシカ麻シカハシカあシカくシカハシカ衣シカ

記ハ獅子の丸シカと何シカうシカ獅子の形シカを丸シカくシカ紋シカハ漆シカくシカるシカ韋シカあり

一 シカ又ハ丸の内シカハ獅子を漆シカくシカるシカ物シカ也

一 シカ品韋シカと云ハ地シカハ藍シカりシカてシカ書シカくシカ漆シカてシカ白シカくシカ 菫シカ菜シカの多シカのシカ取シカを

漆シカりシカくシカるシカ 菫シカ菜シカハシカ正シカ月シカ祝シカハシカ用シカるシカ 志シカハシカ韋シカとシカいシカハシカ言シカをシカたシカとシカハ

五シカ者シカハシカ通シカ者シカ志シカハシカ韋シカとシカ云シカ又シカ一シカ説シカハシカ始シカハシカ黄シカハシカ漆シカてシカ之シカ後シカ

繩シカをシカ巻シカてシカ大豆シカのシカ紗シカりシカてシカ漆シカてシカ物シカハシカ虫シカ信シカ子シカをシカ以シカてシカ色シカを

あシカけシカるシカ韋シカ也シカ志シカ地シカハシカ黄シカハシカ繩シカをシカ巻シカたるシカ何シカハシカ何シカハシカ貴

きシカハシカ繩シカとシカ大豆シカとシカ虫シカ信シカ子シカとシカ四シカのシカ名シカあるシカ故シカ四シカ名シカ韋シカとシカ

いシカハシカこシカとシカいシカハシカ説シカいシカハシカ一シカ茶シカのシカ説シカをシカ用シカハシカ漆シカ平シカ盛シカ表

志ハ韋シカと云ハ
志ハ韋シカと云ハ
又ハシカ正シカ月シカ祝シカハシカ用シカるシカ
と書シカハシカ四シカ名シカ韋シカ
支那韋シカはシカ志シカ
韋シカハシカ志シカとシカ云シカ
説シカハシカ用シカハシカ

日洗草と名有りると同意之退社の名は家次才延喜
後及寮式之外古記祿装束抄ありも凡そ日本記天智

天皇六
年ノ記小桃染布衣服合は桃染衫万葉集は桃花褐延喜

彈正式は桃染布衫右何色もアラ
ブレともむは家次才は荒染とあり

皆退社のより桃染とハ枕の花の色のみくうすおは染を

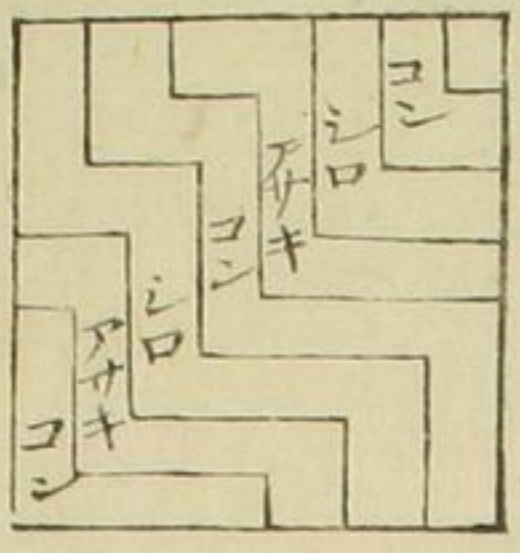
云ふ又荒染と云ハあはひ染の畧語之洗染と書きりあり

とも初はあはひ染と云ハ荒の字を傳りて書之洗草のる是

日て考知へし洗染社の色を洗てきうすく成る心也

赤草と云ハ赤き糸めし草のるは多岐ノ涙涙と緋威と
の袖洗草はありぬと云ふ

係元為悟の
一トあり



ぬは條ヤウナリ
折レテフシク
アル故フシナメ
ト云繩ヲフセタ
ル如クナル故フシ
ナワメト云フニ
テハナシ幕ノ
糸繩ノ如クニテ
其形ハ折レ曲リ
フシクアル故也

婦繩目と云草ハ幕の子繩あとの白糸志の布を
かいますやくもぬく白とうす藍と紺との筋ある染草
こり繩目の遣と云ハ草を細くたちておとる故云
遣之傳記ホ糸糸をり繩目よりおとすと云ハ傳説之
あけの草と云ハ赤草とハ別之あけの草ハ緋の色は染
るもみ草之赤かハ糸めし草之あけの草ハ糸めて染る
赤草ハあはひ染りて染る之ハ威遣といふハあけの草を
細く糸かどくうすあけの糸めて威するハ糸大威と云
丹波目結といふ草を素襖のひも不用るも糸く
す草もるるは丹波國より出る草と目結を染

夫木集六帖題
 衣笠内大臣さま
 されのひすまき
 こちもせきり
 のうのけのり
 いらぬまゆり
 同甚毛の青建
 長八年百三十四
 らりまけのま
 らのうくろく
 りのまをのよ
 まけるま
 同甚毛家集首
 友の心を深伸正
 おちりつらめけ
 のまのらま
 布やあ
 まる甚毛
 まる

おしよして用ひらり草の字を書きするあり古書
 文字の味あく書るるあり心を分て後
 ひきまると云草のひきまると云草の
 左付旅行まらもの刀りまらひきまると云草の
 鞘を尻鞘ひきまると云草の
 ひきまると云草のひきまると云草の
 袋の糸を尻鞘と云ひきまると云草の
 大志不草といふひきまると云草の
 志不草といふ

一行藤ムカハキとする麻の皮の糸より甚毛同甚毛の秋かけ

秋二毛フタヘ「秋毛の冬うけて思き」むらう毛ありと云
 あり麻の四季又毛のかりる物之を名列たに記す
 甚毛といふは五月以後毛色黄より白星ありまらふ
 出るを云毛ハ十五六七の少年用と云
 甚毛の秋のけらると云ハ秋毛をて甚毛の古毛ハ長く
 秋の新毛ハ短くまらむと云ハありまらふと云ハ
 をむらうてのけらると云毛夜毛といふよりハ毛と云
 二三十歳以上の入用と云也 尺素律素は陰星秋二毛と云も
 同物也白星のすく成るを陰星と云
 むらう毛と云ハ秋の夜毛の秋うけらると同物也 二あり
 秋二毛と云ハ毛も秋の夜毛の秋うけらると同物也 二あり

うあぎを焼て其煙をてゆまぶたるもすいふは九八出
生さるるのあ

一 アカ子スガ 赤根筋草のる蜻川新右衛門尉官道親元日記云

文明十三辛丑年八月晦日草深木村七郎五郎 三枚道上一

調阿方へ被相談使 潤四 被巻く先日赤根筋草

依云作付口以貴殿へ三枚道と云く赤根筋草 アカ子

苗を以て隣へ赤く筋を出したる事ありし白地へ

て筋ハ赤くありし

一 少す草ハ松葉を火で焼て其煙を少すて色を行き

今世ハ松葉またこの茎と二色を用いて草は白く

紋を止まよハ厚紙にて紋をわらぬきてそれをこひ

是より骨を揃へて後紙の紋をいれき其色を何と

白くあるしうらもきこのやま草ハ草をとりて木

目をもたき休まても色をわらぬ麻糸を横をさうく

と巻を又まがうひは巻きて少すべし糸をときまれば

筋の羽の文のみく紋出るとは外巻をさへは皆色をわら

藍白地 アイシロナ の草と云ハ白き草又藍より紋を白く出

たうと草蒲草も藍白地へ其紋ハ色く何と一々

川大双紙と云藍白地ハ白皮へ藍より紋をとりたる

藍白地を黄く返したる云ハ其の藍白地の草を黄く

洗すに故ハ由元キヨクあり地ハ黄 又小楢を煮返す
と云ふハ小楢草を煮返す洗すに小楢の故ハ煮手
あり藍の布ハ由元キヨクありかと云ふハ藍の上を
又煮返す洗すに

黄白キニラチ地と云ハ白草又紋を黄又出しと云ふ

草を洗ハ白水キキテ酒茶盤一盃
中をうき中セ草を洗煮りありあまびの可もみ
やうと云ふ能ひれハこありを炭火とあり
てもこすれハあと云ふなり

高山皮の草ナレニ弓法集ニ云ハの上ノ葉ノ草

中ハ指を紫草とつぎ下ハ高山皮のま白等の皮あり
とあり言ハ皮未詳推考す藍草ト云ク獅子
の丸を洗出る皮あり一又ハ高山皮ハ地名を
居き也

八幡ヤハタ黒草と云ハ山城國八幡山下大谷村ハ伝る神
人宗紫とすり也ハ八幡黒草と云只黒き草
あり子細あり

額草ニハタと云ハ未詳延喜内藏察式ニ見ゆハ草と云
今ニ見ゆハ皮の形也

畫草エカキと云ハ未詳日記ニ見ゆハ草ハ毛の紋を云

光大曰ゆハから
林ノ際ノ草ニ
今世ハいふ志あり
除キ手國温古
菟ノ鼻ノ毛ノ
たノこト



かきく草ある一
光曰畫草土カハとよむ一不動尊ノエカハ獅子
 牡丹西草あくるの繪格あるハ皆畫草也

繩目十八メの色草と云ハあつても記せ伏繩目の草のるこ
 源平盛衰記ハ繩目の色草又えり

一 小紋の草草と云ハ地草は深て白く小紋あを深かせ
 草之目記ハ小紋の草草是る草蒲草も小紋の草草と

古ハ云ある一 草草の以ハ草蒲の名草なり

一 水巻草と云ハ草かはる草草なりは草を細く巻く草
 草草たるは馬草草云々の草草又巻草なり

あつてもすくく 卷フスベトハウツラ
 卷ナトヲ三ナリ

貞丈雜記卷十四

